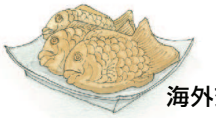
大阪大学外国語学部　イタリア語専攻紹介



海外交流

菊　池　正　和*

Osaka University, School of Foreign Studies, Italian Section

Key Words：Italy, Italian language, Italian studies

日本におけるイタリア語学習者の数は、1990年代前半からのいわゆる「イタリア・ブーム」によって飛躍的に増大した。従来からの美術や建築、歴史などに対する興味に加え、料理やファッション、サッカーといった生活文化への嗜好や関心の高まりが、イタリア語の学習需要をも牽引したと考えられる。その後はしかし、こうした文化的な要請に基づく潜在的な需要をなかなかビジネスと結びつけられず、日本・イタリア両国の経済的な失速も相俟って、学習人口が頭打ちなのが現状である。

1．日本におけるイタリア語教育

日本の高等教育機関におけるイタリア語教育は、東京外国語学校（現東京外国語大学）が最初で、1899年にすでに学科が設置されている。その後、専修・学科としては1940年の京都大学、1964年の大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）と続き（ただし、本学においてはすでに前身の大阪外国語学校時代からフランス語学科の兼修外国語としてイタリア語の講座が開講されている）、現在では7つの大学・短大に、イタリア語あるいはイタリア文学の専攻課程が置かれている。

また、第二外国語としてのイタリア語も含めた高等教育については、文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」（平成21年度）における「外国語教育の実施状況」の中に詳細を見ることができる（表1）。平成21年度には、国立大学19、公立大学11、私立大学89、計119の大学でイタリア語教育が行われていることがわかる。英語、中国語、フランス語、ドイツ語、朝鮮語、スペイン語、ロシア語に次いで8番目に学ばれている外国語ということになる。カリキュラムや難易度別のクラス編成などの詳細については、この文科省のデータからはわからないが、上記の7大学の専攻課程におけるイタリア語教育が、専ら言語や文学、地域研究といった分野に特化した形で行われているのに対して、第二外国語科目としてイタリア語を設置しているのは、音楽系や芸術・デザイン系、建築・都市工学系など、生活文化への広い関心に対応した学科であることが予想される。

表1．学部段階における外国語教育の実施状況

	国立	公立	私立	計
英語	82	75	574	731
フランス語	77	50	409	536
ドイツ語	81	49	395	525
スペイン語	39	21	180	240
中国語	78	61	482	621
ロシア語	46	22	97	165
ラテン語	27	9	59	95
朝鮮語	66	43	341	450
アラビア語	11	5	33	49
イタリア語	19	11	89	119

文部科学省ホームページ「大学における教育内容等の改革状況について」（2011年8月24日付）より作成。

2．外国語学部イタリア専攻

2007年10月の大阪大学との統合に伴い、大阪大学外国語学部イタリア語専攻として新たなスタート

* Masakazu KIKUCHI
1973年6月生
京都大学大学院文学研究科博士後期課程
単位取得退学
現在、大阪大学大学院言語文化研究科
言語社会専攻　講師　文学修士
近現代イタリア演劇
TEL：072-730-5223
FAX：072-730-5223
E-mail：m_kikuch@lang.osaka-u.ac.jp

を切ることになったが、大阪外国語大学時代から数えると今年（2014年）創立50周年を迎えることになる。

現在、イタリア語専攻の入学定員は20名、専任教員は大学院言語文化研究科と外国語学部に所属する日本人教員が2名とイタリア人教員1名、それに特任のイタリア人教員が1名、他部局との兼任教員が2名である。その他、8名の非常勤講師がイタリア関係の授業を担当している。

当専攻に入学してくる学生の興味や関心は幅広く多岐にわたるが、大半の学生は在学中の留学を希望している。実際、半数近くの学生が卒業までに現地へ渡り、様々な経験を通して研鑽を積んでいるが、現在当専攻には交流協定を締結している大学がないために、学生は休学して現地の大学等へ留学し、単位互換を受けることもできずに講義を受けて帰国しているのが現状である。イタリアの大学との交流協定締結は、卒業後のイタリア語を活かした就職先の開拓と並んで喫緊の課題である。

3．イタリア語について

イタリア語は、古代ローマの公用語であったラテン語から派生したロマンス系言語の1つである。「俗ラテン語」と呼ばれた話し言葉としてのラテン語が、ローマ帝国の拡大とともに各地で次第に変化していき、地域ごとに異なった言語に発展していったのである。

イタリア半島の内側においても、様々な地域的ロマンス語が成立していたが、その中で14世紀のトスカーナで使われていた文学語が、現在われわれが「イタリア語」と呼んでいる言語の基になっている。16世紀の言語論争を経て、ダンテやペトラルカ、ボッカッチョが作品を著した14世紀のトスカーナの言葉こそが「国語」として選ばれたのである。

現在、イタリア語はイタリア共和国の公用語であることに加え、地理的にはイタリアの一部であるヴァティカン市国やサン・マリーノ共和国、そしてスイス連邦の公用語の1つでもある。また、南仏地中海沿岸やスロヴェニア、クロアチアのアドリア海沿岸、さらにはソマリア共和国にもイタリア語話者が存在している。南北アメリカ大陸やオーストラリアに住むイタリア系移民の子孫まで含めると、概して二言語併用とはいえ、イタリア語話者は約6000万人程度と推計される。

次にイタリア語の基本的な特徴を学習者の視点から紹介する。文字は英語などと同じアルファベットであるが、j, k, w, x, yの5文字は現代イタリア語では通常用いられず、外来語や古語にのみ用いられる。また、hの文字は音価がない。発音と綴りの関係はかなり規則的で、通常1つの綴りに対応する発音は常に一定である。またその発音はローマ字のそれと大部分が一致しており、母音が概ね日本語と近いこともあって、日本人学習者にとって発音は比較的容易であると思われる。

文法においては、英語の文法の概念や枠組みがかなり通用するものの、詳細に比較すると違う点も少なくない。ここでは相違点を中心に見ていくことにしよう。まず、名詞には男性名詞と女性名詞の2種類があり、単数・複数の相違と同様に、語末母音の形態で見分けがつく場合がほとんどである。そしてこの名詞の性・数に合わせて、それを修飾する形容詞や冠詞の形態にも変化が生ずることになる。また、動詞に関しての最大の特徴はその活用である。イタリア語の動詞は、人称・時制・態・法などによって語形変化（活用）するが、英語と比べると人称変化がより完備している。一人称から三人称まで、単数と複数それぞれに語形が異なるので、動詞の変化形を見れば主語を特定できる。従って、主格代名詞を省略することができる。時制に関しては，過去形の相違を挙げておこう。イタリア語には、ある出来事を完結したものとして表現する遠過去と、出来事をその展開の過程において捉え、その時点では完結していないものとして提示する半過去、そして形態としては英語の現在完了（have + pp）に相当する形をとりながら、明確に過去を表わす語句とともに用いることもできる、最も一般的に用いられる近過去などがある。最後に、動詞の表す動作に主語がどう関わるかを表現する文法形式である「態」であるが、イタリア語には能動態、受動態に加えて、他のロマンス語同様、動作の対象が動作を行う者自身であるような再帰態が存在する。

最後にイタリア語の文字の紹介を兼ねて、カルロ・コッローディ著『ピノッキオの冒険』（1883）の冒頭の部分を引用したい。この『ピノッキオ』は、「母を訪ねて三千里」の原作となった『クオーレ』同様、

それまで外国支配も含めて多くの小国に分裂していたイタリアが1861年に統一された後、新しい国民の創出のために子どもの教育に力を入れようとしていた時期の作品である。

C'era una volta...
－ Un re! － diranno subito i miei piccoli lettori. No, ragazzi, avete sbagliato. C'era una volta un pezzo di legno. Non era un legno di lusso, ma un semplice pezzo da catasta, di quelli che d'inverno si mettono nelle stufe e nei caminetti per accendere il fuoco e per riscaldare le stanze.

むかしむかし、あるところに・・・・・・
「王様だ！」小さい読者のみんなは、すぐにそういうだろうね。残念ながら、そうではないんだ。むかし、あるところに一本の棒っきれがあった。べつに立派な棒ではない。ただの薪ざっぽうで、冬のあいだストーブや暖炉にくべて、部屋をあたためる時に使うやつだ。
【『新訳ピノッキオの冒険』大岡　玲訳、角川文庫、p. 3】